

# 『近年の長野県麻績村における 県内地区別・市郡別人口移動の分析的研究』

高 沢 勇

## は じ め に

前掲第1稿「戦後の長野県麻績村における人口動態の分析的研究」においては、人口の自然動態・社会動態などについて総体的見地から分析し、その特徴を解明した。その結果、戦後の長野県東筑摩郡麻績村における人口減少の大きな要因は社会的減少であることが明らかになった。

それでは、県内移動は具体的にどのように行なわれたのであろうか。換言するならば、麻績村の人口は県内10地区（1. 佐久地区、2. 上小地区、3. 長野地区、4. 北信地区、5. 木曾地区、6. 大北地区、7. 松本地区、8. 諏訪地区、9. 上伊那地区、10. 下伊那地区）のどの地区に何人転出したのか、どの地区から何人転入したのか。市部（都市）へは何人転出したのか。市部からは何人転入したのか。郡部（農山村）へは何人転出したのか、郡部からは何人転入したのか。市部の中では、県下17市（〈佐久地区〉1. 小諸市、2. 佐久市〈上小地区〉3. 上田市〈長野地区〉4. 長野市、5. 須坂市、6. 更埴市〈北信地区〉7. 中野市、8. 飯山市〈大北地区〉9. 大町市〈松本地区〉10. 松本市、11. 塩尻市〈諏訪地区〉12. 岡谷市、13. 諏訪市、14. 茅野市〈上伊那地区〉15. 伊那市、16. 駒ヶ根市〈下伊那地区〉17. 飯田市）のどの市に何人転出したのか、どの市から何人転入したのか。郡部の中では、県下16郡（1. 南佐久郡、2. 北佐久郡、3. 小県郡、4. 諏訪郡、5. 上伊那郡、6. 下伊那郡、7. 木曾郡、8. 東筑摩郡、9. 南安曇郡、10. 北安曇郡、11. 更級郡、12. 埴科郡、13. 上高井郡、14. 下高井郡、15. 上水内郡、16. 下水内郡）のどの郡へ何人転出したのか、どの郡から何人転入したのか。その毎年の実態および戦後の推移はどのようであったのか。

麻績村の社会変動の原因を探究するためには、人口移動の側面において、以上の点を明らかにしておく必要がある。そこで、本稿においては、長野県総務部情報統計課より入手した、最近15年間の統計資料にもとづいて、近年の麻績村における県内地区別・市郡別転出入人口の実態を分析し、その特徴を解明したい。

### 1. 県内地区別・市郡別転出入人口の実態と特徴

#### (1) 全体的特徴

麻績村の県内地区別・市郡別転出入人口の実態は第1表に示したとおりである。長野県総務部情報統計課によると、この種の統計は1976年（昭51）からとり始めたものであるから、残念ながら、それ以前の統計は見当たらない。

第1表 県内地区別・市郡別転出人口

	合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991				合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991		
	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位		実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位
合計	(人) 1,463	(%) 100.0		(人) 507	(%) 100.0		(人) 524	(%) 100.0		(人) 432	(%) 100.0		木曾地区	(人) (9)	(%) (0.6)	順位 (10)<8>	(人) (7)	(%) (1.4)	順位 (8)<6>	(人) (1)	(%) (0.2)	順位 (10)<9>	(人) (1)	(%) (0.2)	順位 (10)<9>
市計	1,012	69.2		339	66.9		361	68.9		312	72.2		大北地区	(33)	(2.3)	(6)	(10)	(2.0)	(6)	(4)	(0.8)	(8)	(19)	(4.4)	(4)
郡計	457	31.2		169	33.3		161	30.7		127	29.4		大町市	17	1.2	8	1	0.2	12	3	0.6	11	13	3.0	5
<不明>	-6	-0.4		-1	-0.2		2	0.4		-7	-1.6		その他(郡)	16	1.1	<5>	9	1.8	<4>	1	0.2	<9>	6	1.4	<4>
佐久地区	(33)	(2.3)	(6)	(7)	(1.4)	(8)	(15)	(2.9)	(5)	(11)	(2.5)	(6)	松本地区	(772)	(52.8)	(1)	(261)	(51.5)	(1)	(277)	(52.9)	(1)	(234)	(54.2)	(1)
小諸市	9	0.6	13	4	0.8	10	3	0.6	11	2	0.5	13	松本市	414	28.3	1	150	29.6	1	146	27.9	1	118	27.3	1
佐久市	14	1.0	9	0	0.0	15	7	1.3	9	7	1.6	7	塩尻市	68	4.6	3	19	3.7	4	21	4.0	3	28	6.5	3
その他(郡)	10	0.7	<7>	3	0.6	<8>	5	1.0	<4>	2	0.5	<7>	その他(郡)	290	19.8	<1>	92	18.1	<1>	110	21.0	<1>	88	20.4	<1>
上小地区	(72)	(4.9)	(4)	(32)	(6.3)	(3)	(18)	(3.4)	(4)	(22)	(5.1)	(3)	諏訪地区	(76)	(5.2)	(3)	(28)	(5.5)	(4)	(29)	(5.5)	(3)	(19)	(4.4)	(4)
上田市	58	4.0	4	25	4.9	3	12	2.3	5	21	4.9	4	岡谷市	24	1.6	6	12	2.4	6	8	1.5	8	4	0.9	10
その他(郡)	14	1.0	<6>	7	1.4	<6>	6	1.1	<3>	1	0.2	<9>	諏訪市	24	1.6	6	6	1.2	9	16	3.1	4	2	0.5	13
長野地区	(403)	(27.5)	(2)	(130)	(25.6)	(2)	(160)	(30.5)	(2)	(113)	(26.2)	(2)	茅野市	8	0.5	15	1	0.2	12	1	0.2	14	6	1.4	8
長野市	293	20.0	2	88	17.4	2	117	22.3	2	88	20.4	2	その他(郡)	20	1.4	<3>	9	1.8	<4>	4	0.8	<5>	7	1.6	<3>
須坂市	14	1.0	9	0	0.0	15	9	1.7	6	5	1.2	9	上伊那地区	(36)	(2.5)	(5)	(22)	(4.3)	(5)	(7)	(1.3)	(7)	(7)	(1.6)	(7)
更埴市	32	2.2	5	15	3.0	5	9	1.7	6	8	1.9	6	伊那市	13	0.9	11	7	1.4	8	3	0.6	11	3	0.7	12
その他(郡)	64	4.4	<2>	27	5.3	<2>	25	4.8	<2>	12	2.8	<2>	駒ヶ根市	3	0.2	16	2	0.4	11	0	0.0	15	1	0.2	16
北信地区	(17)	(1.2)	(9)	(2)	(0.4)	(10)	(8)	(1.5)	(6)	(7)	(1.6)	(7)	その他(郡)	20	1.4	<3>	13	2.6	<3>	4	0.8	<5>	3	0.7	<6>
中野市	9	0.6	13	1	0.2	12	6	1.1	10	2	0.5	13	下伊那地区	(18)	(1.2)	(8)	(9)	(1.8)	(7)	(3)	(0.6)	(9)	(6)	(1.4)	(9)
飯山市	0	0.0	17	0	0.0	15	0	0.0	15	0	0.0	17	飯田市	12	0.8	12	8	1.6	7	0	0.0	15	4	0.9	10
その他(郡)	8	0.5	<9>	1	0.2	<9>	2	0.4	<8>	5	1.2	<5>	その他(郡)	6	0.4	<10>	1	0.2	<9>	3	0.6	<7>	2	0.5	<7>

資料出所：長野県総務部情報統計課

注(1). <不明>誤差は、合計数から市計・郡計数を差し引いた数である。(本来は一致するはずであるが、実際には人口台帳の合計数と県内市町村別転出入記録帳の市・郡合計数とが一致しない年があるので、明記しておく。)

注(2). 順位を表す数字は、( )内が地区別、無印が市別、< >内が郡別である。

まず、麻績村の県内地区別転出人口の実態と特徴を、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間の合計数でみることにする。その実数と構成比で地区別の順位をみると、第1位は松本地区（52.8%）で全体の5割強を占めている。実数は772人であるから、年平均51人が同地区に転出したことになる。第2位は長野地区（27.5%）で全体の3割弱を占めている。実数は403人であるから、年平均27人が同地区に転出している。したがって、第1位の松本地区と第2位の長野地区だけで、麻績村の県内転出人口の8割強（80.3%）を占めているわけである。残りの約2割の人口が他の8地区に分散している。ちなみに、その順位をみると、第3位諏訪地区（5.2%）、第4位上小地区（4.9%）、第5位上伊那地区（2.5%）、第6位佐久地区（2.3%）・大北地区（2.3%）、第8位下伊那地区（18人、1.2%）、第9位北信地区（17人、1.2%）、第10位木曾地区（0.6%）の順である。

次に、県内市郡別転出人口総数の実態と特徴をみると、市部への転出が全体の69.2%、郡部への転出が31.2%である。したがって、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間における麻績村の県内転出人口の約7割は市部に転出したわけであり、残りの約3割が郡部に転出したことになる。

さて、上述の地区別転出人口の特徴と市郡別転出人口の特徴をクロスすると、麻績村の県内転出人口の多くは、松本地区と長野地区の両地区の市部へ転出していることになる。

そこで次に、県内市別転出人口の実態と特徴をみると、第1位は松本市（28.3%）で全体の3割弱を占める。実数は414人であるから、年平均28人が同市に転出したことになる。第2位は長野市（20.0%）で全体のちょうど2割を占める。実数は293人であるから、年平均20人が同市に転出している。したがって、第1位の松本市と第2位の長野市だけで、麻績村の県内転出人口の約5割（48.3%）を占めているわけである。それはまた、麻績村の県内市部転出人口の約7割（69.9%）を占める。この残りの約3割が他の15市部に分散している。ちなみに、その順位をみると、第3位塩尻市（4.6%）、第4位上田市（4.0%）、第5位更埴市（2.2%）の順となる。第6位以下は構成比2.0%未満となっている。

以上の点を総合して結論的にいうと、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間における麻績村の県内転出は、地区別では松本地区とこれについて長野地区に集中しており、市別では、松本市とこれについて長野市に集中しているということになる。

## (2) 地区別・市郡別転出人口の推移と特徴

ここでは、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間における麻績村の県内地区別・市郡別転出人口の推移を、5年間ごとの数字でみることにしたい。

まず、県内地区別転出人口の推移と特徴をみると、3つの期間を通して松本地区が第1位である。その実数をみると、1970年代後半の261人から1980年代前半には277人へと16人増加しているが、1980年代後半には234人へと43人の減少を示している。構成比でみると、1970年代後半の51.5%から1980年代前半には52.9%に、さらにその後半には、実数の減少とは逆に、54.2%に上昇しており、一貫

して5割強を保っている。全期間を通して第2位は長野地区である。その実数をみると、1970年代後半の130人から1980年代前半には160人へと30人増加しているが、その後半には113人へと47人の減少を示している。構成比でみると、1970年代後半の25.6%から1980年代前半には30.5%に上昇しているが、1980年代後半には26.2%に下降した。しかしながら、一貫して2割5分以上を保っている。したがって、全期間を通して松本地区と長野地区への転出人口が全体の7割5分以上を占めており、残りの2割5分未満の転出人口が他の8地区に分散している。この8地区への転出人口はいずれも低率であり、どの地区の、どの期間においても10%未満である。細部については前掲第1表を参照してほしい。

次に、県内市郡別転出人口総数の推移と特徴についてみると、全期間を通して市部への転出人口が多く、郡部へのその2倍強である。まず、市部への転出人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半の339人から1980年代前半には361人へと22人増加したが、その後半には312人へと49人減少している。この推移を構成比でみると、1970年代後半の66.9%から1980年代前半には68.9%に、さらにその後半には、実数の減少にもかかわらず、72.2%にまで上昇している。ついで、郡部への転出人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半の169人から1980年代前半には161人へと8人減少し、さらにその後半には127人へと34人の減少を示している。この推移を構成比でみると、1970年代後半の33.3%から1980年代前半には30.7%に、さらにその後半には29.4%に減少している。したがって、麻績村の県内転出人口は市部（都市）に集中する傾向があることになる。

そこで次に、県内市別転出人口の推移と特徴をみると、全期間を通して松本市が第1位である。その実数をみると、1970年代後半の150人から1980年代前半には146人へと4人減少し、その後半には118人へと28人の減少を示している。構成比でみると、1970年代後半の29.6%から1980年代前半には27.9%に、さらにその後半には27.3%に下降している。しかしながら、全期間を通して3割弱の高比率を維持している。全期間を通して第2位は長野地区である。その実数をみると、1970年代後半の88人から1980年代前半には117人へと29人増加しているが、その後半には再び88人へと29人減少している。構成比でみると、1970年代後半の17.4%から1980年代前半には22.3%に上昇し、その後半には20.4%に低下している。しかしながら、全期間を通して約2割の比較的高比率を保っている。したがって、全期間を通して、松本市と長野市への転出人口が全体の約5割を占めている。しかしながら、松本市への転出人口は3期間を通して実数、構成比ともに減少傾向にあり、長野市へのそれも1980年代前半から後半にかけては実数、構成比ともに減少している。これに対して、全期間を通して、実数、構成比ともに増加傾向を示しているのは、佐久市、大田市、塩尻市、茅野市の4市である。したがって、これら4市の増加傾向が、県内転出人口に占める市部転出人口の比率を高めていることになる。しかしながら、上述の4市におけるそれぞれの期間の構成比は、最高でも1980年代後半の塩尻市の6.5%にすぎない。なお、詳細は前掲第1表を参照してほしい。

## 2. 県内地区別・市郡別転入人口の実態と特徴

### (1) 全体的特徴

麻績村の県内地区別・市郡別転入人口の実態は第2表に示したとおりである。

まず、麻績村の県内地区別転入人口の実態と特徴を、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間の合計数でみることにする。その実数と構成比で地区別の順位をみると、第1位は松本地区（48.7%）で全体の5割弱を占めている。実数は553人であるから、年平均37人が同地区から転入したことになる。第2位は長野地区（27.4%）で全体の3割弱を占めている。実数は311人であるから、年平均21人が同地区から転入している。したがって、第1位の松本地区と第2位の長野地区だけで、麻績村の県内転入人口の7割5分強（76.1%）を占めているわけである。残りの約2割5分の人口が他の8地区に分散している。ちなみに、その順位をみると、第3位上小地区（4.9%）、第4位諏訪地区（4.8%）、第5位上伊那地区（3.4%）、第6位大北地区（2.9%）、第7位北信地区（2.6%）、第8位佐久地区（2.2%）、第9位下伊那地区（1.9%）、第10位木曾地区（1.1%）の順である。

次に、県内市郡別転入人口総数の実態と特徴をみると、市部からの転入が66.2%、郡部からの転入が33.7%である。したがって、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間における麻績村の県内転入人口の6割5分強は市部から転入したわけであり、残りの3割5分弱が郡部から転入したことになる。

さて、上述の地区別転入人口の特徴と市郡別転入人口の特徴をクロスすると、麻績村の県内転入人口の多くは、松本地区と長野地区の両地区の市部から転入していることになる。

そこで次に、県内市別転入人口の実態と特徴をみると、第1位は松本市（25.7%）で全体の約2割5分を占める。実数は292人であるから、年平均19人が同市から転入したことになる。第2位は長野市（18.4%）で全体の2割弱を占める。実数は209人であるから、年平均14人が同市から転入している。したがって、第1位の松本市と第2位の長野市だけで、麻績村の県内転入人口の約4割5分（44.1%）を占めているわけである。それはまた、麻績村の県内市部転入人口の6割5分強（66.7%）を占めている。この残りの3割5分弱が他の15市部に分散している。ちなみに、その順位をみると、第3位塩尻市（4.2%）、第4位更埴市（3.3%）、第5位上田市（2.6%）、第6位伊那市（2.3%）の順である。第7位以下は構成比2.0%未満である。

以上の点を総合して結論的にいうと、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間における麻績村の県内転入は、地区別では松本地区とこれについて長野地区から集中しており、市別では松本市とこれについて長野市から集中していることになる。

### (2) 地区別・市郡別転入人口の推移と特徴

ここでは、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間における麻績村の県内地区別・市郡別転入人口の推移を、5年間ごとの数字でみることにしたい。

まず、県内地区別転入人口の推移と特徴をみると、3期間を通して松本地区が第1位である。そ

の実数をみると、1970年代後半の193人から1980年代前半には185人へと8人減少し、その後半には175人へとさらに10人減少している。構成比では、1970年代後半の47.5%から1980年代前半には50.4%に上昇し、その後半には再び48.3%に下降している。しかしながら、全期間を通して約5割の高比率を保っている。全期間を通して第2位は長野地区である。その実数をみると、1970年代後半の106人から1980年代前半には104人へと2人減少し、その後半には101人へとさらに3人減少している。構成比では、1970年代後半の26.1%から1980年代前半には28.3%に上昇し、その後半には再び27.9%に下降している。しかしながら、全期間を通して2割5分強から3割弱の比較的高比率を維持している。したがって、全期間を通して、松本地区と長野地区からの転入人口が全体の7割5分弱から8割弱を占めており、残りの2割強から2割5分強の転入人口が他の8地区に分散している。この8地区からの転入人口はいずれも低率であり、どの地区の、どの期間においても10%未満である。なお、細部については前掲第2表を参照してほしい。

次に、県内市郡別転入人口総数の推移と特徴についてみると、全期間を通して市部からの転入人口が多く、郡部からのその約2倍である。まず、市部からの転入人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半の256人から1980年代前半には249人へと7人減少し、その後半には246人へとさらに3人減少している。この推移を構成比でみると、1970年代後半の63.1%から1980年代前半には67.8%に上昇し、その後半にはさらに68.0%に上昇している。ついで、郡部からの転入人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半の149人から1980年代前半には118人へと31人減少し、その後半には116人へとさらに2人減少している。この推移を構成比でみると、1970年代後半の36.7%から1980年代前半には32.2%に下降し、その後半にはさらに32.0%に下降している。したがって、麻績村への転入人口は、市部からの転入が増加する傾向にあるといえる。

そこで次に、県内市別転入人口の推移と特徴をみると、全期間を通して松本市が第1位である。その実数をみると、1970年代後半の105人から1980年代前半には94人へと11人減少し、その後半には93人へとさらに1人減少している。構成比でみると、1970年代後半の25.9%から1980年代前半には25.6%に下降し、その後半には25.7%へとわずかながら上昇している。全期間を通してみると、2割5分強という高比率を維持している。全期間を通して第2位は長野地区である。その実数をみると、1970年代後半の69人から1980年代前半には64人へと5人減少したが、その後半には76人へと12人増加している。構成比でみると、1970年代後半の17.0%から1980年代前半には17.4%に上昇し、その後半にはさらに21.0%に上昇している。全期間を通してみると、1割7分以上の比較的高比率を保っている。したがって、全期間を通して、松本市と長野市からの転入人口が全体の約4割3分以上を占めている。しかしながら、前述のごとく、松本市からの転入人口は、実数において減少傾向を示しており、構成比においても1970年代後半から1980年代前半にかけて0.3%の下降を示しており、その後半には0.1%上昇したにすぎない。これに対して、全期間を通して、実数、構成比ともに増加傾向を示しているのは、前述の長野市に加えて、塩尻市と岡谷市の3市である。したがって、これら3市の増加傾向が、県内転入人口に占める市部転入人口の比率を高めていることになる。

第2表 県内地区別・市郡別転入人口

	合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991				合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991		
	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位		実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位
合計	(人)	(%)		(人)	(%)		(人)	(%)		(人)	(%)		木曾地区	(人)	(%)		(人)	(%)		(人)	(%)		(人)	(%)	
	1,135	100.0		406	100.0		367	100.0		362	100.0			(12)	(1.1)	(10)<7>	(6)	(1.5)	(9)<6>	(3)	(0.8)	(10)<7>	(3)	(0.8)	(10)<7>
市計	751	66.2		256	63.1		249	67.8		246	68.0		大北地区	(33)	(2.9)	(6)	(15)	(3.7)	(5)	(4)	(1.1)	(9)	(14)	(3.9)	(4)
郡計	383	33.7		149	36.7		118	32.2		116	32.0		大町市	7	0.6	12	4	1.0	11	0	0.0	13	3	0.8	12
<不明>	1	0.1		1	0.2		0	0.0		0	0.0		その他(郡)	26	2.3	<3>	11	2.7	<3>	4	1.1	<6>	11	3.0	<3>
佐久地区	(25)	(2.2)	(8)	(11)	(2.7)	(7)	(9)	(2.5)	(6)	(5)	(1.4)	(8)	松本地区	(553)	(48.7)	(1)	(193)	(47.5)	(1)	(185)	(50.4)	(1)	(175)	(48.3)	(1)
小諸市	2	0.2	16	1	0.2	14	0	0.0	13	1	0.3	14	松本市	292	25.7	1	105	25.9	1	94	25.6	1	93	25.7	1
佐久市	7	0.6	12	1	0.2	14	4	1.1	11	2	0.6	13	塩尻市	48	4.2	3	13	3.2	4	17	4.6	4	18	5.0	3
その他(郡)	16	1.4	<6>	9	2.2	<5>	5	1.4	<4>	2	0.6	<8>	その他(郡)	213	18.8	<1>	75	18.5	<1>	74	20.2	<1>	64	17.7	<1>
上小地区	(56)	(4.9)	(3)	(15)	(3.7)	(5)	(19)	(5.2)	(3)	(22)	(6.1)	(3)	諏訪地区	(55)	(4.8)	(4)	(24)	(5.9)	(3)	(18)	(4.9)	(4)	(13)	(3.6)	(5)
上田市	30	2.6	5	11	2.7	5	6	1.6	8	13	3.6	4	岡谷市	21	1.9	7	5	1.2	9	8	2.2	6	8	2.2	6
その他(郡)	26	2.3	<3>	4	1.0	<8>	13	3.5	<2>	9	2.5	<4>	諏訪市	16	1.4	9	8	2.0	6	7	1.9	7	1	0.3	14
長野地区	(311)	(27.4)	(2)	(106)	(26.1)	(2)	(104)	(28.3)	(2)	(101)	(27.9)	(2)	茅野市	0	0.0	17	0	0.0	17	0	0.0	13	0	0.0	16
長野市	209	18.4	2	69	17.0	2	64	17.4	2	76	21.0	2	その他(郡)	18	1.6	<5>	11	2.7	<3>	3	0.8	<7>	4	1.1	<5>
須坂市	16	1.4	9	6	1.5	8	6	1.6	8	4	1.1	8	上伊那地区	(39)	(3.4)	(5)	(23)	(5.7)	(4)	(5)	(1.4)	(8)	(11)	(3.0)	(7)
更埴市	38	3.3	4	8	2.0	6	26	7.1	3	4	1.1	8	伊那市	26	2.3	6	14	3.4	3	2	0.5	12	10	2.8	5
その他(郡)	48	4.2	<2>	23	5.7	<2>	8	2.2	<3>	17	4.7	<2>	駒ヶ根市	3	0.3	15	3	0.7	12	0	0.0	13	0	0.0	16
北信地区	(29)	(2.6)	(7)	(7)	(1.7)	(8)	(9)	(2.5)	(6)	(13)	(3.6)	(5)	その他(郡)	10	0.9	<8>	6	1.5	<6>	3	0.8	<7>	1	0.3	<9>
中野市	18	1.6	8	5	1.2	9	9	2.5	5	4	1.1	8	下伊那地区	(21)	(1.9)	(9)	(5)	(1.2)	(10)	(11)	(3.0)	(5)	(5)	(1.4)	(8)
飯山市	6	0.5	14	1	0.2	14	0	0.0	13	5	1.4	7	飯田市	12	1.1	11	2	0.5	13	6	1.6	8	4	1.1	8
その他(郡)	5	0.4	<10>	1	0.2	<10>	0	0.0	<10>	4	1.1	<5>	その他(郡)	9	0.8	<9>	3	0.7	<9>	5	1.4	<4>	1	0.3	<9>

資料出所：前掲第1表と同じ。

注：前掲第1表と同じ。

しかしながら、上述の塩尻市と岡谷市の両市におけるそれぞれの期間の構成比は、最高でも1980年代後半の塩尻市の5.0%にすぎない。なお、詳細は前掲第2表を参照してほしい。

### 3. 県内地区別・市郡別転出入超過人口の実態と特徴

#### (1) 全体的特徴

麻績村の県内地区別・市郡別転出入超過人口の実態は第3表に示したとおりである。

まず、麻績村の県内地区別転出入人口の実態と特徴を、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間の合計数でみることにする。転出超過実数とその構成比の高さを基準として地区別の順位をみると、第1位は松本地区（66.8%）で全体の6割5分強を占めている。（ただし、この構成比は転入超過地区におけるマイナスが含まれているので、比較的高くなっていることを付記しておく。その他の転出超過地区の構成比においても同様である。しかし、マイナスの合計は6.4%にすぎない。）実数は219人の転出超過であるから、年平均15人である。第2位は長野地区（28.0%）で3割弱を占めている。実数は92人の転出超過で、年平均6人である。したがって、第1位の松本地区と第2位の長野地区だけで、麻績村の県内転出入超過総人口の94.8%を占めている。第3位は諏訪地区（6.4%）で1割未満である。実数は21人（転出超過）と少ない。これにつづく転出超過地区を挙げると、第4位上小地区（4.9%）、第5位佐久地区（2.4%）の順となる。第6位の大北地区は転出入超過数がゼロである。残りの4地区はいずれも転入超過地区である。先に挙げた基準に従って、転入超過数の少ない方からその順位をみると、第7位には木曾地区（-0.9%）、上伊那地区（-0.9%）、下伊那地区（-0.9%）の3地区が並んでいる。最後の第10位は北信地区（-3.7%）である。

次に県内市郡別転出入超過人口総数の実態と特徴をみると、市部への転出超過が全体の79.6%を占め、郡部への転出超過は22.6%である。したがって、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間における麻績村の県内転出超過人口の約8割が市部に転出したことになり、残りの約2割が郡部に転出したわけである。

さて、上述の県内地区別転出入超過総人口の特徴と県内市郡別転出入超過総人口の特徴とをクロスしてみると、麻績村の県内転出超過人口の大部分は、松本地区と長野地区の両地区の市部へ流出していることになる。

そこで次に、県内市別転出入超過総人口の実態と特徴をみると、第1位は松本市（37.2%）である。実数は122人（転出超過）で、年平均8人である。第2位は長野市（25.6%）である。実数は84人（転出超過）で、年平均6人である。したがって、第1位の松本市と第2位の長野市との合計は、麻績村の県内転出入超過総人口の62.8%を占めている。それはまた、麻績村の県内市部転出入超過総人口の約8割（78.9%）を占める。第3位は上田市（8.5%）で1割未満である。実数は28人（転出超過）と比較的少ない。これにつづく転出超過市を挙げると、第4位塩尻市（6.1%）、第5位大町市（3.0%）、第6位諏訪市（2.4%）、茅野市（2.4%）、第8位小諸市（2.1%）、



佐久市（2.1％）、第10位岡谷市（0.9％）の順となる。第11位の駒ヶ根市と飯田市はいずれも転出入超過数がゼロである。残りの5地区はいずれも転入超過地区である。先に挙げた基準に従って、転入超過数の少ない方からその順位をみると、第13位須坂市（-0.6％）、第14位更埴市（-1.8％）、飯山市（-1.8％）、第16位中野市（-2.7％）、最後の第17位は伊那市（-4.0％）である。

ちなみに、県内郡別転出入超過総人口の実態と特徴を概観してみると、第1位は松本地区（郡部）・（23.5％）である。実数は77人（転出超過）で、年平均5人である。第2位は長野地区（郡部）であるが、構成比は4.9％であるから、松本地区（郡部）と比べると著しく低い。これにつづく転出超過の地区別郡部を挙げると、第3位上伊那地区（郡部）・（3.0％）、第4位北信地区（郡部）・（0.9％）、第5位諏訪地区（郡部）・（0.6％）の順になる。残りの5地区（郡部）はいずれも転入超過を示している。先に挙げた基準に従って、転入超過数の少ない方からその順位をみると、第6位木曾地区（-0.9％）、下伊那地区（郡部）・（-0.9％）、第8位佐久地区（郡部）・（-1.8％）、第9位大北地区（郡部）・（-3.0％）、最後の第10位は上小地区（郡部）・（-3.7％）である。

以上の点を総合して、その特徴を結論的にいうと、1976年（昭51）から1991年（平3）までの最近15年間ににおける麻績村の県内転出入超過人口は、全体的には明らかに多数の転出超過を示している。その転出超過人口は、地区別では松本地区とこれについて長野地区に集中的に流出しており、市別では松本市とこれについて長野市に集中している。また、地区単位ごとの郡部別では松本地区（郡部）に集中していることになる。これに対して、転入超過を示しているのは、地区別では北信地区について木曾地区、上伊那地区、下伊那地区の4地区であるが、実数はきわめて少ない。市別では伊那市について中野市、更埴市、飯山市および須坂市の5市であるが、これも実数は著しく少ない。また、地区単位ごとの郡部別では上小地区（郡部）について大北地区（郡部）、佐久地区（郡部）、木曾地区、下伊那地区（郡部）の5地区（郡部）であるが、やはり実数はきわめて少ない。

ちなみに、転出超過の地区・市部・郡部の数と転入超過のそれとを比較してみると、地区別では10地区中、転出超過5地区、転出入超過ゼロ1地区、転入超過4地区となる。市別では17市中、転出超過10市、転出入超過ゼロ2市、転入超過5市となる。地区単位ごとの郡部別では10地区（郡部）中、転出超過5地区（郡部）、転入超過5地区（郡部）となる。

## (2) 地区別・市郡別転出入超過人口の推移と特徴

ここでは、1976年（昭51）から1991年（平3）までの15年間ににおける麻績村の県内地区別・市郡別転出入超過人口の推移を、5年間ごとの数字でみることにする。

まず、県内地区別転出入超過人口の推移と特徴を、前述の合計数の順位に従ってみる。総合第1位の松本地区は、全期間を通して第1位を占めている。その転出超過実数をみると、1970年代後半の68人から1980年代前半には92人へと24人増加しているが、その後半には59人へと33人の減少を示している。構成比でみると、1970年代後半は67.3％であるが、1980年代前半は実数の増加に反して58.6％に低下している。しかし、1980年代後半は、実数の減少にもかかわらず、84.3％へと急激な

第3表 県内地区別・市郡別転出入超過人口

	合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991				合計			1976～1981			1981～1986			1986～1991		
	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位		実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位	実数	構成比	順位
合計	(人) △328	(%) 100.0		(人) △101	(%) 100.0		(人) △157	(%) 100.0		(人) △70	(%) 100.0		木曾地区	(人) (3)	(%) (-0.9)	順位 (7)<6>	(人) (△1)	(%) (1.0)	順位 (6)<5>	(人) (2)	(%) (-1.3)	順位 (9)<7>	(人) (2)	(%) (-2.9)	順位 (8)<7>
市計	△261	79.6		△83	82.2		△112	71.3		△66	94.3		大北地区	(0)	(0.0)	(6)	(5)	(-5.0)	(9)	(0)	(0.0)	(6)	(△5)	(7.1)	(5)
郡計	△74	22.6		△20	19.8		△43	27.4		△11	15.7		大町市	△10	3.0	5	3	-3.0	14	△3	1.9	6	△10	14.3	3
<不明>	7	-2.1		2	-2.0		△2	1.3		7	-10.0		その他(郡)	10	-3.0	<9>	2	-2.0	<7>	3	-1.9	<9>	5	-7.1	<8>
佐久地区	(△8)	(2.4)	(5)	(4)	(-4.0)	(8)	(△6)	(3.8)	(4)	(△6)	(8.6)	(3)	松本地区	(△219)	(66.8)	(1)	(△68)	(67.3)	(1)	(△92)	(58.6)	(1)	(△59)	(84.3)	(1)
小諸市	△7	2.1	8	△3	3.0	8	△3	1.9	6	△1	1.4	9	松本市	△122	37.2	1	△45	44.6	1	△52	33.1	2	△25	35.7	1
佐久市	△7	2.1	8	1	-1.0	10	△3	1.9	6	△5	7.1	7	塩尻市	△20	6.1	4	△6	5.9	6	△4	2.5	5	△10	14.3	3
その他(郡)	6	-1.8	<8>	6	-5.9	<10>	0	0.0	<6>	0	0.0	<6>	その他(郡)	△77	23.5	<1>	△17	16.8	<1>	△36	22.9	<1>	△24	34.3	<1>
上小地区	(△16)	(4.9)	(4)	(△17)	(16.8)	(3)	(1)	(-0.6)	(7)	(0)	(0.0)	(7)	諏訪地区	(△21)	(6.4)	(3)	(△4)	(4.0)	(4)	(△11)	(7.0)	(3)	(△6)	(8.6)	(3)
上田市	△28	8.5	3	△14	13.9	3	△6	3.8	4	△8	11.4	5	岡谷市	△3	0.9	10	△7	6.9	4	0	0.0	12	4	-5.7	15
その他(郡)	12	-3.7	<10>	△3	3.0	<4>	7	-4.5	<10>	8	-11.4	<10>	諏訪市	△8	2.4	6	2	-2.0	13	△9	5.7	3	△1	1.4	9
長野地区	(△92)	(28.0)	(2)	(△24)	(23.8)	(2)	(△56)	(35.7)	(2)	(△12)	(17.1)	(2)	茅野市	△8	2.4	6	△1	1.0	9	△1	0.6	10	△6	8.6	6
長野市	△84	25.6	2	△19	18.8	2	△53	33.8	1	△12	17.1	2	その他(郡)	△2	0.6	<5>	2	-2.0	<7>	△1	0.6	<4>	△3	4.3	<2>
須坂市	2	-0.6	13	6	-5.9	16	△3	1.9	6	△1	1.4	9	上伊那地区	(3)	(-0.9)	(7)	(1)	(-1.0)	(7)	(△2)	(1.3)	(5)	(4)	(-5.7)	(9)
更埴市	6	-1.8	14	△7	6.9	4	17	-10.8	17	△4	5.7	8	伊那市	13	-4.0	17	7	-6.9	17	△1	0.6	10	7	-10.0	17
その他(郡)	△16	4.9	<2>	△4	4.0	<3>	△17	10.8	<2>	5	-7.1	<8>	駒ヶ根市	0	0.0	11	1	-1.0	10	0	0.0	12	△1	1.4	9
北信地区	(12)	(-3.7)	(10)	(5)	(-5.0)	(9)	(1)	(-0.6)	(7)	(6)	(-8.6)	(10)	その他(郡)	△10	3.0	<3>	△7	6.9	<2>	△1	0.6	<4>	△2	2.9	<3>
中野市	9	-2.7	16	4	-4.0	15	3	-1.9	15	2	-2.9	14	下伊那地区	(3)	(-0.9)	(7)	(△4)	(4.0)	(4)	(8)	(-5.1)	(10)	(△1)	(1.4)	(6)
飯山市	6	-1.8	14	1	-1.0	10	0	0.0	12	5	-7.1	16	飯田市	0	0.0	11	△6	5.9	6	6	-3.8	16	0	0.0	13
その他(郡)	△3	0.9	<4>	0	0.0	<6>	△2	1.3	<3>	△1	1.4	<4>	その他(郡)	3	-0.9	<6>	2	-2.0	<7>	2	-1.3	<7>	△1	1.4	<4>

資料：前掲第1表と同じ

注：前掲第1表と同じ

高率化を示している。総合第2位の長野地区は、全期間を通して第2位である。その転出超過実数をみると、1970年代後半の24人から1980年代前半には56人へと32人増加しているが、後半は12人へと44人もの減少を示した。構成比でみると、1970年代後半は23.8%であるが、1980年代前半には35.7%に上昇した。しかし、後半には17.1%に急減している。松本地区の実数を長野地区のそれと比較すると、1970年代後半は2.8倍、1980年代前半は1.6倍、1980年代後半は4.9倍になる。したがって、第1位の松本地区と第2位の長野地区との実数における格差が大きい。しかし、総合第3位以下の各地区の各期間の実数は、上小地区の1970年代後半における16.8%を除けば、すべて10%未満である。それゆえ、麻績村の県内地区別転出超過人口は、全期間を通して松本地区とこれにつぐ長野地区の両地区に集中的に流出していることになる。ことに松本地区への流出は、構成比の側面からみると、1980年代後半において最も高く、ついで1970年代後半、1980年代前半の順となる。なお、細部については前掲第3表を参照してほしい。

次に、県内市郡別転出入超過人口総数の推移と特徴についてみると、全期間を通して市部への転出超過人口の方が著しく多い。郡部への転出超過人口と比較すると、1970年代後半は4.2倍、1980年代前半は2.6倍、1980年代後半は6.0倍になる。そこでまず、市部への転出超過人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半は83人であるが、1980年代前半には112人へと29人増加した。しかし、その後半には66人へと46人も減少している。この推移を構成比でみると、1970年代後半は82.2%であるが、1980年代前半には実数の増加とは逆に71.3%に低下した。しかし、その後半には、実数の大幅な減少に反して、94.3%にまで上昇している。ついで、郡部への転出超過人口の推移と特徴を、その実数でみると、1970年代後半は20人であるが、1980年代前半には43人に倍増した。しかし、その後半には11人に激減している。この推移を構成比でみると、1970年代後半は19.8%であったが、1980年代前半には27.4%に上昇する。しかし、その後半には15.7%にまで落ちこんでいる。したがって、麻績村の県内転出超過人口は、7割強から9割5分弱の高率で市部に集中する傾向を示している。

そこで次に、県内市別転出入超過人口の推移と特徴を、前述の合計数の順位に従ってみる。総合第1位の松本市は、1970年代後半は第1位、1980年代前半は第2位、その後半は再び第1位を占めている。その転出超過実数と構成比をみると、1970年代後半は45人(44.6%)であるが、1980年代前半には52人(33.1%)へと実数の増加に対し構成比は低下している。その後半には25人(35.7%)へと実数の半減に対し構成比は幾分上昇している。このように流動的なため、15年間の推移では増加・減少傾向あるいは停滞傾向等を速断できないが、全期間を通して約3割5分から4割5分という高率を維持している。総合第2位の長野市は、1970年代後半は第2位、1980年代前半は第1位、その後半は再び第2位を占めている。その転出超過実数と構成比をみると、1970年代後半は19人(18.8%)であるが、1980年代前半には53人(33.8%)へと実数は3倍に、構成比は約2倍に増加した。しかし、その後半には12人(17.1%)へと実数・構成比ともに著しい急減を示している。それにもかかわらず、全期間を通して約2割から3割5分弱という比較的高率を保っている。総合第

3位は上田市であるが、その順位の変動をみると、1970年代後半は第3位であるが、1980年代前半は第4位（第3位は諏訪市）、後半は第5位（第3位は大町市と塩尻市）である。転出超過実数と構成比をみると、1970年代後半は14人（13.9%）であったが、1980年代前半には6人（3.8%）へと実数は半減し、構成比は約4分の1に低下した。後半は8人（11.4%）へと構成比が急増している。総合第4位以下の市については、実数が少ないので、分析を省略したい。なお、細部については前掲第3表を参照してほしい。

ちなみに、県内郡別転出入超過人口の推移と特徴を、前述の合計数の順位に従って概観しておく。総合第1位の松本地区（郡部）は、全期間を通して第1位を占めている。その転出超過実数と構成比をみると、1970年代後半は17人（16.8%）であるが、1980年代前半には36人（22.9%）へと実数は2.1倍に、構成比は1.4倍に増加した。後半には24人（34.3%）へと実数は減少したが、構成比は1.5倍に上昇している。総合第2位は長野地区（郡部）であるが、その順位の変動をみると、1970年代後半は第3位（第2位は上伊那地区・郡部）、1980年代前半が第2位、後半は第8位である。その実数と構成比をみると、1970年代後半は4人（転出超過）・（4.0%）であったが、1980年代前半には17人（転出超過）・（10.8%）へと実数・構成比ともに増加した。しかし、1980年代後半には転入超過で5人（-7.1%）になっている。こうしてみると、麻績村の県内郡別転出超過人口は、3期間とも松本地区（郡部）に集中的に流出しており、構成比の推移をみると、その傾向が顕著である。総合第3位以下の地区別郡部については、前掲第3表を参照してほしい。

#### 4. 本稿の総括

本稿においては、長野県総務部情報統計課より入手した最近15年間の統計資料にもとづいて、麻績村における県内地区別・市郡別転出入人口の実態について分析した。ここで、その特徴について総括しておきたい。

まず、第1章の「県内地区別・市郡別転出入人口の実態と特徴」について要約する。「全体的特徴」をみると、地区別では、10地区の中で第1位が松本地区（実数772人、構成比52.8%）である。（なお、東筑摩郡麻績村は松本地区に含まれる。）第2位は長野地区（実数403人、構成比27.5%）である。第3位は諏訪地区（実数76人、構成比5.2%）である。したがって、松本地区と長野地区の合計は80.3%を占めている。

市・郡別では、市部（都市）が1,012人で全体の69.2%を占め、郡部（農山村）は457人で全体の31.2%を占めている。したがって、麻績村の県内転出人口の約7割は市部に流出し、残りの約3割が郡部に流出しているわけである。

市（都市）別では、県下17市の中で第1位が松本市（実数414人、構成比28.3%）である。第2位は長野市（実数293人、構成比20.0%）である。第3位は塩尻市（実数68人、構成比4.6%）である。したがって、松本市と長野市の合計は48.3%を占めている。市部だけの合計数に占めるその比率は69.9%に及んでいる。

地区別の郡部では、第1位が松本地区（郡部）（実数290人、構成比19.8%）である。第2位は長野地区（郡部）（実数64人、構成比4.4%）である。第3位は諏訪地区（郡部）と上伊那地区（郡部）（両者とも実数20人、構成比1.4%）である。したがって、松本地区（郡部）と長野地区（郡部）の合計は24.2%を占めている。郡部だけの合計数に占めるその比率は77.5%に達している。

次に、第2章の「県内地区別・市郡別転入人口の実態と特徴」について要約する。「全体的特徴」をみると、地区別では、10地区の中で第1位が松本地区（実数553人、構成比48.7%）である。第2位は長野地区（実数311人、構成比27.4%）である。第3位は上小地区（実数56人、構成比4.9%）である。したがって、松本地区と長野地区の合計は76.1%を占めている。

市・郡別では、市部が751人で全体の66.2%を占め、郡部は383人で全体の33.7%を占めている。したがって、麻績村の県内転入人口の6割6分は市部から流入し、残りの3割4分が郡部から流入しているわけである。

市別では、県下17市の中で第1位が松本市（実数292人、構成比25.7%）である。第2位は長野市（実数209人、構成比18.4%）である。第3位は塩尻市（実数48人、構成比4.2%）である。したがって、松本市と長野市の合計は44.1%を占めている。市部だけの合計数に占めるその比率は66.7%に及んでいる。

地区別の郡部では、第1位が松本地区（郡部）（実数213人、構成比18.8%）である。第2位は長野地区（郡部）（実数48人、構成比4.2%）である。第3位は上小地区（郡部）（実数26人、構成比2.3%）である。したがって、松本地区（郡部）と長野地区（郡部）の合計は23.0%を占めている。郡部だけの合計数に占めるその比率は68.2%に達する。

最後に、第3章の「県内地区別・市郡別転入人口の実態と特徴」について要約する。「全体的特徴」をみると、地区別では、10地区の中で転出超過地区が5地区、転入超過地区が4地区、転出入超過ゼロの地区が1地区である。転出超過人口の多い順にみると、第1位が松本地区（転出超過219人、構成比66.8%）である。（なお、構成比は転入超過が含まれているので幾分高くなっていることを付記しておく。以下同様である。）第2位は長野地区（転出超過92人、構成比28.0%）である。第3位は諏訪地区（転出超過21人、構成比6.4%）である。したがって、松本地区と長野地区の合計は全体の94.8%を占めている。

市・郡別では、市部が転出超過261人で全体の79.6%を占め、郡部は転出超過74人で全体の22.6%を占めている。したがって、麻績村の県内転出超過人口の約8割は市部に流出し、残りの約2割が郡部に流出しているわけである。

市別では、県下17市の中で転出超過市が10市、転入超過市が5市、転出入超過ゼロの市が2市である。転出超過人口の多い順にみると、第1位が松本市（転出超過122人、構成比37.2%）である。第2位は長野市（転出超過84人、構成比25.6%）である。第3位は上田市（転出超過28人、構成比8.5%）である。したがって、松本市と長野市の合計は62.8%を占めている。市部だけの合計数に占めるその比率は78.9%に及んでいる。

地区別の郡部では、10地区（郡部）の中で転出超過地区（郡部）が5地区（郡部）、転入超過地区（郡部）が5地区（郡部）である。転出超過人口の多い順にみると、第1位が松本地区（郡部）（転出超過77人、構成比23.5%）である。第2位は長野地区（郡部）（転出超過16人、構成比4.9%）である。第3位は上伊那地区（郡部）（転出超過10人、構成比3.0%）である。したがって、松本地区（郡部）と長野地区（郡部）の合計は28.4%を占めている。

## お わ り に

冒頭で触れたように、本稿では、長野県総務部情報統計課より入手した、最近15年間の統計資料にもとづいて、麻績村における県内地区別・市郡別転出入人口の実態について分析し、その特徴を解明した。残された課題である、麻績村における県外地域別転出入人口の実態についての分析は、別稿（第3稿）で取り扱う。なお、前掲第1稿の冒頭で触れたように、本稿の総括をも含めた全体的総括は、第3稿の最後におこなう。

## 参 考 資 料 ・ 文 献

※前掲第1稿の参考資料・文献と重複するものもあるが、便宜上、主要なものを挙げておくことにしたい。

- 1) 長野県総務部情報統計課「人口台帳（市町村別）」各年度版
- 2) 長野県総務部情報統計課編集『長野県統計書』長野県統計協会、各年度版
- 3) 長野県総務部情報統計課編集・発行『長野県の人口（毎月人口異動調査結果報告）』各年度版
- 4) 総理府統計局編集・発行『国勢調査報告（長野県版）』昭和30・35・40・45・50・55年度版
- 5) 総務庁統計局編集・発行『国勢調査報告（長野県版）』昭和60年度版、平成2年度版
- 6) 国土庁計画・調整局編『我が国の人口移動の実態（昭和57年12月） — 「人口移動要因調査」の解説 — 』大蔵省印刷局、1982年
- 7) 橋本和幸編著『「定住」の社会学的研究』多賀出版、1988年
- 8) 福武直著『現代日本社会論（第2版）』東京大学出版会、1977年
- 9) 今井幸彦編著『日本の過疎地帯』岩波書店、1968年
- 10) 宮本憲一著『地域開発はこれでよいか』岩波書店、1973年